

学術論文における思考判断を表す文末表現の用法

—「と思う」と「と考える」を中心にして—

杉 田 く に 子

1. はじめに

日本の大学で学ぶ留学生にとって、レポートや論文は、日本語で書くことが特に難しいタイプの文章と言えるだろう。そこでは、資料を説明、提示して自らの考えや判断を述べることが要求される。こうした意見述べの場面で、日本語母語話者は、状況や相手に応じて自分の立場や取るべき態度を微妙に調整し、それに合わせて様々なモダリティ形式を使い分ける。しかし日本語学習者の場合、上級者であってもそうしたことへの配慮に乏しくなりがちである。その結果、例えば、次のように「と思う」の過度の使用といった事態が起こる。

私はアメリカが核兵器（ママ）を廃止すべきではないと思う。なぜならアメリカは国民連合（ママ）のビッグファイブとして、地球の平和を守るべきだと思う。このビッグファイブはアメリカ、中国、フランス、旧ロシア、オーストラリアである。この国々は核兵器を持って、世界のパワーの均衡を保たなければならない。核兵器は危ない武器と思うが、これがないと世界の争いを抑えることができないと思う。具体例というと湾岸戦争（ママ）のときであった。

そこで本稿では、「と思う」と「と考える」、またその派生形である「と思われる」、「と考えられる」を取り上げ、それぞれの用法上の特徴と形式段落との関係を考える。これらの使い分けの分析にはヴォイスとアスペクトの観点があり得るが、紙幅の都合上、ここでは前者に絞って考察する。

2. 先行研究

本動詞としての「思う」と「考える」について、長島（1979）は、いずれも話し手の現在の精神的な活動状態を表すもので、「思う」は心の、また「考える」は頭の働きに関わるとする。そしてこれらが文末表現として用いられると、断定の調子が和らげられ、「と思う」では直覚的、情緒的判断が、「と考える」では知力を働かせた結果の論理的判断が示されるとする。

森山 (1992) は、「と思う」における情報の個人性に注目し、これが文末表現として不確実性や主観性を表示するメカニズムを分析した。さらに森山 (1996) では、「と思う」にはその情報が個人的な意見であることを強調し事実として扱われることを回避する働きがあるために、公的な情報発信の場では不適切となること、一方「と思われる」は判断主体が消された客観的な表現であるのでそうした場でも問題なく使われうることを示した。

また浅野 (1996) は、対照語用論の立場から「と思われる」とその英語の対訳表現を分析している。そして、「と思われる」には発話の緩和や客観性の暗示、責任回避といった働きがあるとした上で、その使用の背景に、日本語における文型選択の尺度としては「他者の反対意見や他の可能性がない場合でも、十分な証拠のないことはいわないこと」というルールがあることを指摘した。

さらに安達 (1996) は、「思える」と「思われる」の差を、自発と可能的意味的な連続性を探るという問題意識から検討している。その結果、「思われる」は自発としての典型的な用法で用いられ、否定や第三者にとっての自発を表す場合には「思える」が使われることが多い、という傾向を見出している。

このように、文末表現としての「思う、思われる (思える)」については、多様な角度からの考察が加えられてきている。半面、同様の用法を持つ「考える」との関係については、本動詞用法に準拠したレベルの説明にとどまっているのが現状である。

3. 資料

資料収集に当たっては、ジャンルを一つの明確なものに限定しつつ、書き手の個人的なスタイルからの影響を避けることに留意した。そこで、1990年から1995年の間に歴史学の専門誌『史学雑誌』に掲載された日本史学論文の序論部分を用いた。執筆者はすべて日本人研究者で、重複を避けて30名、30篇の論文を収集したところ、51,428字、696文のデータが集まった⁽¹⁾。その中から動詞の「思う」「考える」及びその派生形「思われる」「考えられる」を抜き出し、さらに助詞「と」「ように」を伴って文末表現として振る舞い、思考・判断の意味を持つもののみを分析対象として取り出した⁽²⁾。ただし、複文の節末に現れるものでも、同様の用法を持つものは資料の中に含めた。

4. 分析

資料中に見られた「と思う」系および「と考える」系表現の用法を表1に示した⁽³⁾。「と思う」の少なさは、論文というジャンルの性格からある程度予測できたことであるが、それに比しての「と思われる」の多さ、また「と考える」に対する「と考えられる」の少なさは興味深い。

次に、図1と図2は、「と思う」系、「と考える」系文末表現を伴う文が、段落中のどこに位置するかを示す。「と思う」系、「と考える」系ともに、70%以上の数値を示す用例が全体

表 1. 「と思う」系, 「と考える」系文末表現の用例数

	と思う系			と考える系	
	と思う	と思える (とは思えない)	と思われる	と考える	と考えられる
用例数 (論文数)	5 (4)	1 (1)	19 (12)	15 (12)	8 (7)
用法	判断	5	0	15	0
	自発	0	19	0	0
	受身	0	0	0	1
	可能	0	0	0	7

図 1. 「と思う」系文末表現の段落内の位置

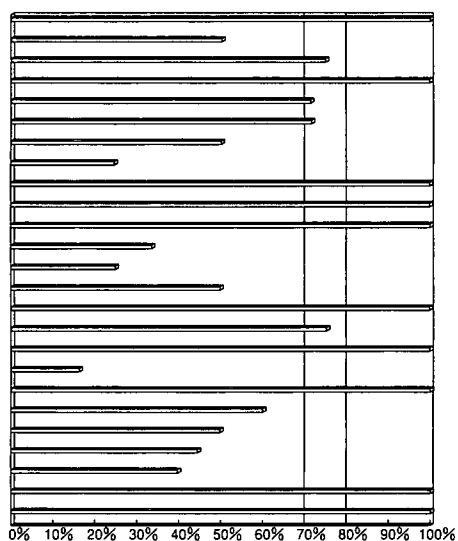
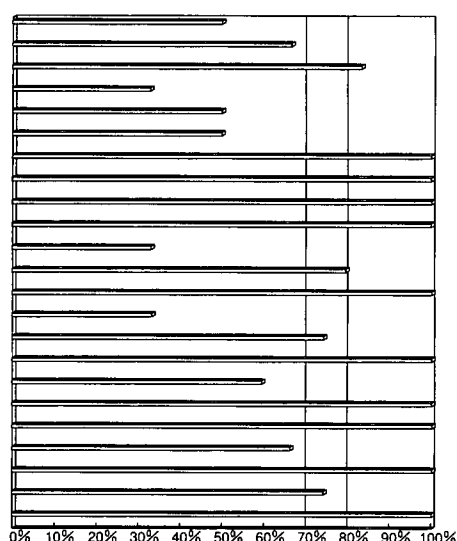


図 2. 「と考える」系文末表現の段落内の位置



注・図の見方は、例えば、4 文から成る段落の 4 文目（末尾文）である場合には 100% となる。

表 2. 段落内の文の位置

	と思う系				と考える系		
	と思う	と思える	と思われる		と考える	と考えられる	
100%	10(40.0%)*	2(40.0%)	0(0.0%)	8(42.1%)	10(43.5%)	5(33.3%)	5(62.5%)
80%~	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	2(8.7%)	2(13.3%)	0(0.0%)
70%~	4(16.0%)	2(40.0%)	1(100.0%)	1(5.3%)	2(8.7%)	1(6.7%)	1(12.5%)
70~100%	14(56.0%)	4(80.0%)	1(100.0%)	9(47.4%)	14(60.9%)	8(53.3%)	6(75.0%)
用例総数	25	5	1	19	23	15	8

注：図 1、図 2 と同様、例えば、4 文から成る段落の 4 文目（末尾文）である場合には 100% となる。

*比率は、用例総数に対する数値。

の過半数を占めており、両表現とも段落の終わり近くでの使用が多いことがわかる（表2）。

以下、「と思う」系文末表現と「と考える」系文末表現のそれぞれについて用法を検討する。

4.1. 「と思う」系文末表現

「と思う」系文末表現が用いられる文脈を考えると、「と思う」「と思われる」とも、従来の研究との関わりで判断を述べる場合が多い（例1, 例2）⁽⁴⁾。

例1. 特に通説的な時服像が、単に時服のみならず、俸禄の全体構造や原理の問題を理解する上での障害となっていたことは、給与制研究史上の最大の陥穽であると思う。
〈山下1994〉

例2. 従来、令制下の太政官に関する研究は、天皇と太政官との関係をめぐる権力論を中心に進んできたが、あえて弁官を考察対象とすることにより、太上官制を、より官僚制的な側面から検討することが可能になると思われるのである。〈大隅1991〉

一方、「と思う」のみに見られる特徴として、書き手が自らの研究目的や研究テーマの設定理由を述べる用法が挙げられる（例3）。

例3. そして以上を総括するものとして、禄物支給儀礼に注目する。それは日本の俸禄制の思想・構造・原理を象徴していると思うからである。〈山下1994〉

他方、「と思われる」には、過去の研究の不十分さや問題点をこれからの研究でいかに克服するかを述べる用法がある。その場合、「可能である／できる／～なくして～できない／有効な方法になる／必要がある」といった確信的な表現との共起が目立つ（例2, 例4）。

例4. 同省の廃止を必然化したものは何かを探るには、より政治的な視点での検討が必要であると思われる。〈山崎1993〉

以上の「と思う」系文末表現の用法に共通するのは、書き手が従来の研究の動向やその内容を念頭に置いて、それらに対する異論として自己の考えを述べる場合に用いられるということである。そのうち「と思う」の文では、研究目的やテーマ設定の理由など書き手自身の意見、判断がよりストレートに示される。一方、「と思われる」では、「～という判断をするのが自然である、否応なく～なのだ」という自発の意味が付加されることで、思考の主体としての書き手の存在感は薄められる半面、読み手を書き手の思いに巻き込む効果が生まれるようである。このことが、「と思う」と異なり、従来の研究の問題点の克服という、自己の枠を超えた問題を述べる際の使用を可能にしているのだろう。

4.2. 「と考える」系文末表現

「と考える」系文末表現も、従来の研究や書き手自身の研究を内容とする。さらに、例5, 例6のように、他の研究者や書き手自身の歴史解釈が示されることがある。その場合、「[名詞]である」と考える」の「である」が省略された形として現れた。これらは本動詞用法に近いものとも見られるが、「と思う」との用法の違いの一例として日本語学習者に示すことができよう。

例 5. すなわち、高田・米田両氏に代表される如く、従来は十世紀初頭を在庁官人制の成立時期と考えるのが一般的であったが、(後略) … 〈山口 1991〉

例 6. この「合法的」「前分」の出現の経緯と歴史的な性格はいかなるものと考えられるべきなのであろうか。〈福島 1992〉

この他の用法としては、今後の一般的な研究のあり方や、書き手が自分自身の研究についてその意義を述べる場合がある。前者では、「～べきである」「不可欠である」のような書き手の主体性を強く打ち出した表現が共起した(例 7)。

例 7. これからの一揆史研究では、一揆の母体となる村落の動向にもっと目を向け、蓄積の多い一揆史研究と村落史研究の融合をさらに進めて行くべきであると考えられる。〈田中 1993〉

また後者の場合は「～られる」「～できる」「明確化する」のような可能の意を持つ文で用いられ(例 8)、「と思われる」の例 2 と似た性格を持つ。

例 8. このように寺院社会の童を通して、様々な問題がとらえられると考えるのである。〈土谷 1992〉

次に、「と考えられる」は、可能用法が 8 例中 7 例を占めた。受身用法の 1 例は従来の解釈を紹介するもので、テイル形が用いられている(例 9)。

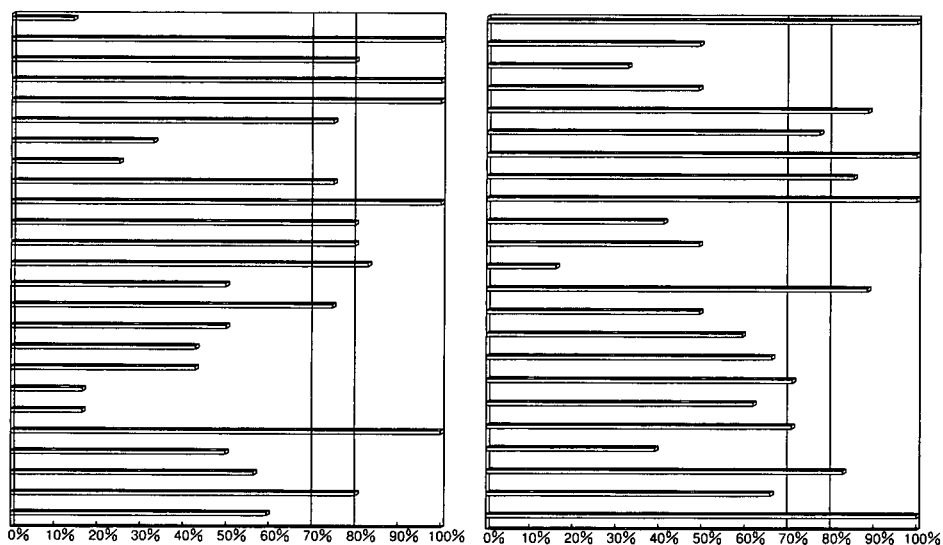
例 9. さらに、徳政一揆と年貢減免闘争はまったく別の一揆として考えられており、両者の関連についても明快な説明がなされていない。〈田中 1993〉

一方、受身に比して動作性の低い可能用法においてはテイル形による表現はなく、また、「と考える」にあったような今後の研究方法を示唆する用法も見られなかった。さらに、研究意義を述べる場合、「と考える」では何ができるようになるかが述べられるのに対し(例 8)、「と考えられる」では、「深いつながりを持つ」「結びついている」といった語と共に、見過ごされがちな事例や史料などの提示が行われる(例 10)。

例 10. 官僚制の特徴の一つが、規律と分業や職務体統制、なにかんずく文書主義に基づく事務処理にあるとすれば、文書行政を集中的に管理することで諸司を統括する弁官の特質は、日本の律令官制自体の特色と深いつながりを持つと考えられよう。〈大隅 1991〉

以上をまとめると、「と考える」系文末表現の用法では、書き手が従来の研究の評価や自分の研究の意義の主張と同時平行的に、自らの主体的な歴史解釈、歴史認識を述べようとする点に特徴がある。したがってそこには、「と思う」系表現のような他説の存在の想定ということとはあまり表に出てこない。むしろ、他説の存在には無関心に、書き手が自身の判断・認識を主張するというニュアンスがある。さらに「と考えられる」は、史料などの客観的データに照らして推測できる、判断できるという意を表す場合に用いられる傾向にある。研究の意義、目的を述べる場合の「と考える」、「と思われる」、「と考えられる」の違いは、この辺りに求められそうである。

図3. 「と思う」系文末表現を含む段落の位置 図4. 「と考える」系文末表現を含む段落の位置



注・図の見方は、例えば、4段落から成る文章の4段落目（最終段落）である場合には100%となる。

表3. 文章全体における思考判断動詞系文末表現の位置

	と思う系	と思う	と思える	と思われる	と考える系	と考える	と考えられる
100% (最終段落)	5 (20.0%)*	3 (60.0%)	0 (0.0%)	2 (10.5%)	4 (17.4%)	3 (20.0%)	1 (12.5%)
80%～	5 (20.0%)	1 (20.0%)	0 (0.0%)	4 (21.1%)	4 (17.4%)	3 (20.0%)	1 (12.5%)
70%～	3 (12.0%)	0 (0.0%)	1 (100.0%)	2 (10.5%)	3 (13.0%)	1 (6.7%)	2 (25.0%)
70%～ 100%	13 (52.0%)	4 (80.0%)	1 (100.0%)	8 (42.1%)	11 (47.8%)	7 (46.7%)	4 (50.0%)
用例総数	25	5	1	19	23	15	8

注：図3、図4と同様、4段落から成る文章の4段落目（最終段落）である場合には100%となる。

*比率は、用例総数に対する数値。

4.3. 文章全体における位置

次に、これらの文末表現と文章構造の関係を考える。

図3、図4は、「と思う」系、「と考える」系文末表現を含む段落が序論全体の中で現れる位置を示したものである。「と思う」系は過半数、「と考える」系でも半数近い用例が、後半部分の段落で用いられている（表3）。

各表現間の相違を検討するには用例が少ないが、あえて言えば、「と思う」が文章最後の段落に現れる割合が高くなっている。同様のことは段落内での文の位置についても観察された。「と思う」のように、書き手が判断主体としての自らを強調する意図の強い表現は、文章構成上終わりの部分に現れやすいということであろう。これに対して、「と考える」や「と思われる」「と考えられる」は、文章の終わり近くではあるが末尾以外の段落で用いられる傾向がある。いずれにしても、書き手の意識の中に、こうした思考判断動詞系文末表現を用いることによって、文章を区切りまとめようとする意図があることがうかがわれる。

5. おわりに

研究論文の序論から、「と思う」「と思われる」「と考える」「と考えられる」が文末表現として用いられている例を集め、それぞれの用法上の特徴を考察した。

以上の検討をもとに冒頭の留学生の作文に戻る。ここで分析したような文末表現を積極的に使うとすれば、例えば次のように修正できよう。

私はアメリカが核兵器を廃止すべきではないと考える。なぜならアメリカは国際連盟のビッグファイブであり、地球の平和を守るべきだからだ。(中略)核兵器は危ない武器だが、これがないと世界の争いを抑えることができないと思われる。

ここで気づくのは、「と思う」系にしても「と考える」系にしても、そう頻繁に使わない方がよいということである。その理由としては、こうした文末表現は断定の調子を和らげる効果があるのだから、強い断定の調子を出したい場合には用いるべきではないということがある。特にこの文章のように全て書き手の考えであることが明確な場合に繰り返し使うと、くどい印象を与えるだけで、かえって逆効果になってしまう。

今回の分析は、コーパスが小さいこと、分析観点がヴォイス的なものに偏っていること、また文章構造上の機能の検討が形式段落との関係にとどまっているという点で、限定的なものであった。第二の点についてはアスペクト的な観点を採り入れる必要がある。また第三点については、ここで取り上げたような文末形式から、意味のまとまりの形成を考えていくことができよう。今後はこれら諸点を視野に入れつつ、コーパスを整えて、思考判断動詞系の文末表現が文章において果たす機能を明確にしてゆきたい。

注

1. 内容は、制度史、経済史、宗教史、政策史、等である。時代としては、律令～平安時代に関するものが10篇、鎌倉～安土桃山時代のものが9篇、明治～昭和時代のものが11篇であった。
2. したがって、「たいと思う」「たいと考える」のような欲求の意味の文末表現は、分析対象に含まれない。

3. 「と考える」については、「として考える」「こう考える」も用例に含めた。
4. 以下、引用順に例文の出典を記す。(いずれも巻号は『史学雑誌』のもの。)
 - 例1・3：山下信一郎（1994）「律令俸禄制と賜禄儀」第103編第10号，1～34頁。
 - 例2・10：大隅清陽（1991）「弁官の変質と律令太政官制」第100編第11号，1～42頁。
 - 例4：山崎有恒（1993）「官業払い下げをめぐる工部省の政策展開とその波紋」第102編第9号，1～24頁。
 - 例5：山口英男（1991）「十世紀の国郡行政機構」第100編第9号，1～39頁。
 - 例6：福島正樹（1992）「家産制的勘会の成立と展開」第101編第2号，43～81頁。
 - 例7・9：田中克行（1993）「村の「半済」と戦乱・徳政一揆」第102編第6号，1～36頁。
 - 例8：土谷恵（1992）「中世寺院の童と児」第101編第12号，1～45頁。

参考文献

- 浅野裕子（1996）『『と思われる』にみる日英の語用論的原則』、『日本語教育』88号，35～47頁。
- 安達太郎（1996）「思エルと思ワレル」，宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（上）単文編』くろしお出版，121～130頁。
- 長島善郎（1979）「オモウとカンガエル」，柴田武他『ことばの意味2。辞書に書いてないこと』平凡社，104～112頁。
- 森山卓郎（1992）「文末思考動詞「思う」をめぐる」『日本語学』11，明治書院，105～116頁。
- 森山卓郎（1996）「ト思ウ，ハズダ，ニチガイナイ，ダロウ，副詞～ ϕ 」，宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（上）単文編』くろしお出版，171～182頁。